このため植物図のない科も多い．記述の内容は大いに改訂され，科内分類群の分類と近縁の科との関連性には分子系統解析の成果が取り入れられている．

本書は被子植物全体を科のレベルで形態を基本として簡潔にまとめており，記載と記述は充実している．文献はやや少ないが，最新のものが引用されている（それでも直ぐに古くなってしまうほど研究のスピードは速い）．科の扱いにも一部に APG II と異なる独自性があり，例えばシラネアオイ科を独立科と認めている．シラネアオイの図がないのは残念であるが，北海道で Brummitt と共にシラネアオイを調べたことが著者の理解を深めたのかもしれない．

本書は旧版と同じく，分類学，形態学，生態学など植物学分野の他に園芸学や林学などの農学分野，薬用植物学分野など，広い範囲の研究者に役立つことが多いだろう．古い分類体系が頭にあるためか旧版と併用すると便利である．改訂版はサイズがやや大きくなり（縦，横，厚さ 32×24×3.5 cm），重くなった（1.6から2.4 kg）が，紙は白色，厚くて上質，製本は堅固である．

なお，評者は以前旧版の邦訳書を書評し（大橋：本誌 **80**: 363−364），文中 hypogynous が「子房下生の」，epigynous が「子房上生の」と正しく和訳されているのに，意味が逆になっていると誤った指摘をしてしまった．この機会に同書の関係者の方々にお詫びします．

（大橋広好）

□太刀掛　優，中村慎吾（編）：**改訂増補帰化植物便覧**．A4．676 pp．2007．￥6,300＋税．比婆科学教育振興会．ISBN: No number.

1998年に刊行したものを改訂増補したものだが，最近の帰化植物の増加ぶりや認識の変化を反映して，サイズが B5 から A4 版となったうえ，頁数は306から676頁と大幅に増えた．前版にはなかった裸子植物とコケ植物が付け加えられている．収容種類数は約2,650種類，これは前版の約 2 倍にあたる．種類ごとにその出現文献が列記され，いかに情報が増加したかが痛感される．

帰化植物は従来の「新しい，珍しい，きれいな」という視点を卒業して，フロラの有力な成員でしかも脚の速い攪乱要因，と考えねばなるまい．そうすると従来の「わが国への渡来は○○年，分布は A，b，c 県」という記述は考え直さねばならないだろう．たとえ過去に記録されていても，現在まだ存在しているかどうかはわからない．だから時刻（少なくとも年）を伴った地点記録を，繰り返し残す必要がある．そういう年代を伴った分布を重ね合わせることにより，帰化植物の動態が把握できるのではないだろうか？　この場合，これまでのような時刻のない記録を重ね合わせて分布点の多さを示すやり方は，なにかあぶなかしい感じがする．ここに示された多数の文献も，そういう視点からは役に立たないものが多いに違いない．

ついでに書くと，かつてセイタカアワダチソウが目立ってきたとき，その調査研究が盛んに行われたが，騒がれなくなった近頃ではなにも行われていないような気がする．なぜ目立たなくなったのか，本当に少なくなったのなら，その理由の調査研究というものも大事なのではなかろうか．もっともこういうことに調査費が出るとは思われないが…．入手については比婆科学教育振興会：727–0013 広島県庄原市西本町 1–7–7（Tel/Fax 0824–72–3234）へ．

（金井弘夫）

□近田文弘：**皇居吹上御苑，東御苑の四季**　B4 版．189 pp．2008．￥2,900．日本放送出版協会．ISBN: 978-4-14-081185-6.

1989年に「皇居の植物」が刊行された後，1996年から天皇皇后両陛下のご意向により，吹上御苑を中心とする皇居の生物相調査が，国立科学博物館を主体として行われた．この調査に参加し，その後も人々に皇居の自然を知ってもらうための自然観察会にたずさわっている著者が，一般の人の立ち入れない吹上御苑をはじめとして，皇居とその周辺の植物について，豊富な写真を用いて解説している．巻頭の折り込みは皇居のカラー俯瞰空中写真で，吹上御苑は遠景になっているとはいえ，普通では目にすることができないものだろう．その裏面は，垂直写真による主要地物の案内図である．

内容は地域を分けて，第一章：吹上御苑とその周辺，第二章：東御苑とその周辺地域，

第三章：皇居外苑地区と北の丸，の三章より成るが，はじめの二章が主体である．自然がよく保存されていると言っても，もともとは江戸城以来の苑地だから，本来の植生もあれば移植されたものもあり，それらが渾然となって遷移を続けている一方，老齢化して衰退の兆しが見られるという．また，武蔵野の景観を目指した雑木林や野草園，および景観を目的とした本来の庭園についても，それらの主要な植物について記されている．各所にある池，濠，流れも，それぞれ特色ある多様な植物が見られるとのこと．

皇居の森は新宿御苑，明治神宮，自然教育園と共に，東京都心の環境維持に大きな役割を持つことが次第に明らかになってきているので，本書がその面での理解を深めるのに役立つだろう．（金井弘夫）

□東京都立園芸高等学校創立百周年記念委員会(編)：**歴史を語る東園の樹々** A4 版．111 pp．2008．価格表示なし．同校同窓会．ISBN: No number．

学校の百周年記念出版となれば，各界名士のあいさつや卒業生の思い出話が延々と続くのが普通だが，本書にはそれがなく，主体は校内にある記念碑の解説と樹木のカラー図鑑である．図鑑は先に日本海草図譜で紹介した大場達之氏（同校出身）のスキャノグラフィーによるもので，79種類が 1 頁 1 種類ずつ図示され，本書の主体となっている．海草図譜の紹介のとき「陸上植物は立体的だからたいへんだろう」と記したが，ホウノキの花やトチノキの花穂のような平面性の悪いと思われるものまで見事に示されている．もっとも，サクラ類では高精度のデジカメを使ったし，バラでは更に工夫を要したとのこと．

当校では昭和46年までは卒業論文の提出が義務づけられていて，同窓会で整理保存されており，そのリストと内容紹介が企画されていたが，個人情報保護と著作権などの問題があってとりやめになり，代わりに数点の卒論の表紙とその簡単な紹介が載せられるにとどまった．分類学関係の人としては，大井次三郎氏，丸山尚敏氏のものが見られる．こんなところまで個人情報を気にせねばならないとは，やりにくい世の中になったものだ．

一般頒布についての計画はなく，残部はごく少数らしいが，連絡先は次の通り．

158-8566 世田谷区深沢 5-38-1　東京都立園芸高等学校同窓会（Tel/Fax 03-3705-2154）

（金井弘夫）

□白岩卓巳：**牧野富太郎と神戸** B5 版．206 pp．2008．￥1,600．神戸新聞総合出版センター．ISBN: 978-4-343-00494-9．

大正の初期，経済的な窮乏に陥っていた牧野富太郎に援助の手を差しのべたのが，神戸の資産家・池永　孟であったことはよく知られている．池永は牧野の標本を買い取る形で借金の返済にあてたうえ，神戸に植物研究所を設立して標本の収容と牧野の研究の場を確保すると共に，研究のための継続的援助を申し出た．当時の池永は大学生の身であり，学術貢献への情熱に動かされた行動だった．しかし植物標本やその整理についての具体的認識に乏しかったことと，牧野の自由奔放な行動が池永の期待とマッチしなかった結果，事業は忽ち行き詰まり，研究所は機能せず，池永の関心が美術品収集に傾いたこともあって，牧野の標本・資料は，神戸市会下山の池永植物研究所に長い間塩漬け状態になっていた．それらが池永の理解の下に牧野の手元に戻されたのは，昭和16年になってからである．その中には標本の他に，牧野が購入し池永が代金を支払った多くの文献・資料も含まれていた．牧野の標本が利用可能な状態に整理が始まるのは，昭和58年に東京都立大学に牧野標本館ができてからである．

本書は池永植物研究所にかかわるほぼ25年にわたる出来事を，神戸を軸として読みやすい文章で物語っており，牧野富太郎を知る上でたいへん有用である．それと共に，池永と同時に牧野の援助を申し出た久原房之助，それを調整した長谷川如是閑，U. Faurie 標本を買い上げて京大へ寄贈した岡崎忠雄，牧野の後半生に援助を与えた神戸港前の旅館主・西村貫一など，地味な学術研究に援助を惜しまない神戸の風土の描写は，著者がひそかに意図したものだろう．山本・田中：牧野富太郎採集行動録も，役に立っているようだ．

（金井弘夫）